

塾中藝

グローバル寺子屋



会報第一号(2015-2016)

塾長の挨拶

グローバル寺子屋と名付けたこの藪中塾、その思いは、グローバルな世界で堂々と戦える人材育成が目的だが、世の中にあまたある人材養成講座とは違い、塾生の自発的なイニシアティブでやってほしい、というものだった。

一期生が一年の活動を終える今、塾生一人一人が何をつかみとったか、月に一度、丸半日を費やした時間が塾生のこれからの人生に大いに意義のある時間だったことを切に願っている。この寺子屋は、これからも続いて行く。新しい息吹が新たな空間を作り出し、さらに発展していくことを期待しているが、旅立つ塾生もいつでもこの巣に立ち戻り、刺激を与えあい、あるいは、一休みしにきてほしい。

志在千里の言葉を胸に Good luck!

目次

薺中塾.....	0
塾長の挨拶	1
運営を通して	3
勉強会報告	5
日米関係(4月).....	6
日米関係(5月).....	8
イスラーム勉強会(6・7月).....	10
安全保障関連法案の是非(8月).....	15
憲法9条を考える(9月)	18
日本の移民政策とその展望(10月).....	23
原発を巡る諸問題とエネルギー政策(11月).....	25
人工知能(12月).....	28
農業からみる TPP(1月).....	31
塾生の声	34
薺中塾での学び.....	34
薺中塾で得たもの.....	36
「本気でやる」ということ.....	38
グローバル人材を目指すあなたが意識すべき3つのこと	39

運営を通して

第1期塾生代表 小林勇貴

2015年4月、藪中塾グローバル寺子屋に「世界で堂々議論できる人材」を目指す若者が集いました。

2013年12月から始まった藪中塾は、1年半ほど紹介で集まった若者、数人のメンバーで活動してきました。藪中塾をさらに良いものにすべく、この第0期のメンバーで力を合わせ第1期の土台を作り上げました。藪中塾として初めて、1年間のカリキュラムを定め、塾生を募集し、選考を行い、新社会人となる0期のメンバーは卒業していきました。そうして始まった第1期は全てが初めての試みでした。第0期から受け継いだバトンを次につなげるべく、前例のない道を突き進んできた様に思います。その道中では、私自身何度も悩みましたが、仲間の支えがあって、こうして次の世代にバトンを渡すところまで来ることができました。共にここまで歩んでくれた仲間に、心から感謝しています。

第1期では塾生が2人1組で勉強会担当として勉強会を運営してきました。勉強会担当は、自身の思う「理想の形」を勉強会へ反映させ、毎月異なる勉強会スタイルを作り出しました。面識のほとんどない、専門分野も年齢も異なるパートナーと勉強会を作り上げていく過程に、時にやりにくさや苛立ちを感じた塾生もいたようです。議論、議論と、知能指数(Interigence Question: IQ)が求められがちではありますが、感情指数(Emotional Interigence Question: EQ)も勉強会を作り上げるためには重要であったのだらうと感じます。私はというと、6個下の塾生とパートナーを組み11月勉強会を担当しました。6月ごろから徐々に準備を始め、2人で何冊も本を読み、ミーティングで議論を重ね、福井県まででかけて原発近辺で生活する方の意見も聞き、梅田で対面ミーティングの時は2人でラーメンを食べに行ったりもしながら勉強会を作り上げました。6年という年齢差にも物怖じなく意見を発し、アグレッシブと一緒に勉強会を作り上げてくれた河崎涼太には心から感謝しています。最高に楽しい時間をありがとう。

第1期の勉強会ほぼ毎月テーマを変え、日中、日米外交から安全保障、中東、社会保障、憲法、発電や人工知能などの技術分野まで幅広いテーマで勉強会を行いました。これだけ幅広いテーマで学んできた1年を終えてみると、自分のなかに知識はかなり蓄積されたと思います。藪中塾外の友人との会話中に

そのことを実感することが多々あり、周りからは、1年間の勉強会を乗り越えてきた蕨中塾生の話せる話題の広さは異様に見えるかもしれません。

しかし、この知識量は付加的なものであり、私たちが磨いてきたものは知識量の上に成り立つ「議論する力」です。勉強会では毎回、勉強会担当が定めたテーマについて数時間に渡る議論を行いました。議論中は、いつでも、発言を切り出すことができます。それは一見、自由気ままな様に見えるかもしれませんが、決してそうではありません。知識欲旺盛な塾生の前で、ロジックのある発言をしなければならないということに、プレッシャーに感じた塾生もいたはずですが、発言をすることが苦手な塾生はそのプレッシャーを跳ね除けるように、得意な塾生は議論をさらに活発なものにするように、議論中、積極的に発言をしていました。

そんな塾生を、蕨中三十二塾長は厳しくも暖かく見守ってくれました。これから世界に出ていく私たちにとって、日本を背負って世界を相手に議論してきた伝説の外交官の近くに身を置けたことはこの上ない経験でした。塾長の議論する姿や立ち振る舞いを見よう見まねし、自分と比べながら日々を過ごしたこの経験は、世界に身を置いた時に必ず生きると確信しています。どんな言語での議論になっても、どんな国の人達がいる中でも、私たちは自分の考えを、ロジックの通った意見として発信していきます。

当たり前の事ですが蕨中塾の塾生であった事は、「まだ」なんのステータスにも、なんのアピールポイントにもならないと思っています。

私たちが「これから」の人生で、世界に貢献した時に初めて、蕨中塾生としての価値が生まれるはずですが。

私たちは、まだまだこれから。

さあ世界で堂々、議論してきてやろうじゃないか。

勉強会報告

藪中塾では、外交や社会保障など様々なテーマで毎月勉強会を行ってきた。以下では、各月の勉強会担当者がそれぞれの勉強会のテーマや、議論についてまとめる。

本年度のテーマは以下の通りである。

4月：日中関係

5月：日米関係

6月：イスラームとの関係

7月：イスラームとの関係(2) ゲスト 池内恵先生

8月：安全保障法案の是非

9月：憲法9条を考える

10月：日本の移民政策とその展望

11月：原発を巡る諸問題とエネルギー政策

12月：人工知能の今後

1月：農業からみる TPP

日米関係(4月)

担当 小川 智之
伴場 森一

初回ということもあり、アイスブレーキングを兼ねているので、比較的議論しやすい日中問題に取り組んだ。ディスカッションテーマは2つである。一つは「大国化する中国とどう向き合うべきか—経済大国化、軍事大国化する中国、この大国化する中国は日本に脅威かどうか？信頼できるパートナーか？」中国の経済成長とそれを背景にした軍備拡大を踏まえ、中国とどう向き合うかという議論である。もう一つは、「アジアインフラ投資銀行に対し日本はどう向き合うべきか」である。ちょうど前年のG20において、話題をさらったホットトピックであった。アメリカ、日本が未加盟という中、アメリカが主導するIBRD、日本が主導するADBへ対抗する中国主導の国際金融機関設立の動きにどう考えるかというところが争点になった。

勉強会の流れとしては、まず中国史概説を行うことで全員の知識レベルを一定にしたのち、中国経済、及びアジアインフラ投資銀行に関してレクチャーが行われ、その後ディスカッションと進んだ。

最初の議論においては「中国の経済成長は目を見張るものであり、その大国化は、英独仏伊のAIIB参加決定が表すように世界中が受け止めているもので、日本も認める必要がある」（竹中）としつつも、「アメリカ経済は、資源力、情報力の強さの下で市場経済の機能が維持される限りにおいてその影響力は保たれる可能性が高く、さらに米国と日本の同盟関係を考慮すると、やはり米国は日本にとって重要なパートナー国である。」（竹中）「安全保障と経済的利益を比較考慮した場合、国家の存続そのものに関わる前者の方が重要であることは明らかである。そのためにもアメリカと足並みを揃えて日米同盟の強化をすることは必須である。」（辻裏）といった指摘が多く、中国との経済的関係は極めて重要であるとしつつも、軍事的には日米関係を維持・強化した上で、中国の軍事力台頭に対抗すべきとの意見が多数を占めた。とはいえそれは中国の台頭をただ脅威とみなすというよりはむしろ「日本は中国及び周辺国の経済発展を脅威として対立するのではなく、相互補完の互惠平等の立場に立てばアジア諸国

の発展に貢献できる。」(竹中) といったように中国を適度にけん制しつつも、協調路線をとることが重要という方向に議論が収束した。

2つ目の議論であるアジアインフラ投資銀行の参加については「中国の既存システムへの挑戦とみるべきであり、既存システムのなかで、恩恵を受けている日本は、新国際機関の樹立により発言力が今までよりも上昇するという目的を中国と共有することはできない。」(沼田)「AIIB の運営方針が不透明で、出資しても発言権がある事が担保されないことや、中国をつけあがらせることにつながる」(小宮山) 事などから、塾生からも参加には否定的な声が大きかった。塾長いわく、外交的にもこれは失敗で、今更加入することもできないのであるという。今後については「AIIB に日本がどう関わるかというより、日本が主導している ADB は AIIB とどう共存していくかについて吟味していくことがより重要」(金谷)「低い発言力にコストをかけるよりは、既存の ADB の出資額を増やすなどの対策により日本の影響力を向上した方が合理的であると思われる。」(沼田) というように、AIIB 以外の面での貢献に力を入れるべきとの意見が多数を占めた。

今回の勉強会は顔合わせという側面もあり、議題が比較的馴染みのある日中関係、あるいはメディアを騒がせたアジアインフラ投資銀行を扱った。「事前課題があればよかった」(庄司) といった声や「グループを固定してのディベート形式になると、グループの立場でしかものが言えなくなるので違和感があった」(小宮山) といった声もあり、勉強会そのもののフレームを今後どのような形で行うのか、またディスカッションの形式はどのように行うべきなのか、今後の課題としていきたい

日米関係(5月)

担当 栞原響子
泉堅太
永井果奈

勉強会の概要

2015年5月の勉強会は、栞原・泉・永井が報告担当となり、日米関係について、主に安全保障面と経済・貿易面から検討した。具体的には、安全保障分野では在日米軍基地の実態や、沖縄の普天間基地の辺野古への移設問題について、また経済分野では TPP 交渉について取り上げた。

はじめに、栞原が、日米関係の現状、とりわけ安全保障分野の基礎知識をレビューし、日米関係の全体的な意味合いでの日米関係とその現状について紹介した。

その上で、泉より在日米軍基地の問題を、とりわけ沖縄における米軍基地問題に関する歴史や現状について勉強し、レポートした。さらにこのセクションでは、栞原が、5月上旬に実際に在沖縄米軍基地や、その周辺を視察、インタビューしたことや、その実態などを紹介し、また沖縄タイムスなどの現地メディアを通じて沖縄県民の声も取り上げた。

続いては、日米の経済関係について永井より報告を行った。TPP 交渉をめぐる日米の協議の様子や、日本が TPP に参加する際の国内へのメリットやデメリットなどについて考察を行った。

その後、担当者の発表に引き続き、日米安保体制をどう考えるか、沖縄の基地問題をどのように考えるかと塾生に問いかけ、全体で議論を行った。塾生を3グループに分け、それぞれに担当者がつき、時間内で各グループが今後の日米関係のあり方について話し合いを行った。各グループの結論を発表し、総括として塾長からの指導を仰いだ。

意義と反省点

本勉強会の意義として、日本にとって極めて重要な日米同盟の実態を基礎から学べたこと、および沖縄の基地問題について踏み込んだ議論ができたことが指摘できる。また、発表担当者が各々で事前準備をしっかりと行ったこともあり、報告の内容は完成度が高かったと言えるだろう。とりわけ、日米関係を「安全保障の観点から」のみならず、それを長年背負い続けている「被害者の立場から」も踏み込んで考察を行ったことは、現状を知り、幅広い観点から問題を考える力を養い、世界で活躍できる人材になる、という蕪中塾の理念にも沿ったものである。

一方で、このような重大な問題について各々の知識にばらつきがあり、また、議論に十分慣れていない塾初期の段階であったため、突っ込んだ議論が行われるまでには至らなかったことは反省材料である。塾生が物怖じせず、より積極的に疑問や意見を投げかけあえる環境づくりをしていくことが、今後の課題であろう。加えて、勉強会終了後に、「沖縄の現状に時間をかけすぎ」「バイアスがかかっていて中立的ではない」といったようなコメントを寄せられた点については、反省点であり、少々残念だった。しかし、今日の日本のメディアは、メディアの本来の役割である政府批判をせず、不気味なほどに中立的な報道のみを行っていることが国内外の研究者の間で問題になっていることは周知の事実である。このことを考えると、このようなコメントが寄せられること自体、政府目線でしか物事を捕らえられていないという現在の若者の現状を象徴しているのかもしれない。政策決定者と、その恩恵を受ける人、犠牲となる人、国際社会。こうした多角的な観点から物事を見つめ、考え、議論し、そこで学んだことを将来的に実践に移す能力を養うことが、私たち蕪中塾という学び舎で求められる最大の使命ではないだろうか。この経験から、これからの勉強会で取り上げる問題を、常に「多角的な視点から」考えることが重要であるということ再認識することができた。是非とも、今回学んだことを踏まえ、これからの勉強会につなげていってほしい。

イスラーム勉強会(6・7月)

担当：板倉美聡
牛込 堯
辻裏雅宏
樋口隆充

【1】イスラーム勉強会の概要

イスラーム勉強会は、一貫性あるカリキュラムのもと複雑な中東情勢を立体的に勉強するため、樋口、牛込、板倉、辻裏の4人で作り上げた。

当時 ISIS が世界を騒がせており塾生の中東に対する関心も高まっていたため、その期待に応えるためにも出来る限りの準備をしようと私たちは4月の時点から話し合いを重ねていた。

全体の流れとしては、6月に「イスラーム教」「歴史」「ISIS」「国際関係」という切り口から中東の基礎知識の習得を目指し、7月はそこで得た知識をもとに中東研究の最前線でご活躍される東京大学准教授の池内恵先生をお迎えし発展的な議論をした。

【2】6月勉強会

6月の勉強会ではイスラーム世界の基本的な知識の習得という目標のもと、担当者4人がそれぞれ必死に考え、当日プレゼンした。いかに複雑な中東情勢をわかりやすくレクチャーするかという点に毎日頭を悩ませていたが、勉強会終了後に多くの塾生から面白かったという感想をいただき、大きな達成感を感じることができた。一方的にプレゼンするのではなく、「塾生参加型勉強会」という今までにないスタイルの形式を提示できたのは議論の活性化という点でも良かったと思う。

(タイムスケジュール)

15:00~15:05：イントロダクション：ゴール、流れの共有

15:05~15:25：牛込のイスラーム講座

15:25~15:45：樋口の歴史ヒストリア～「タテ」から見る中東～

15:45~15:50：休憩

15:50~17:00：中東の国際関係～「ヨコ」から見る中東～

17:00~17:05：休憩

17:05~18:15：ディスカッション

18:15~18:20：休憩

18:20~19:00：藪中先生の話

《ディスカッショントピック》

アメリカは中東（主に ISIS の問題）に介入を続けるべきか

●事前課題①～イスラム国関連の書籍で第1回・藪中塾書評バトル～

(内 容)：イスラム国関連の本を一人一冊読んで、書評を書く

(ねらい)：イスラム国について、様々な見解に触れることで、

多角的な視点から議論する素地を作る。

●事前課題②～激動の中東国際関係を整理しよう～

(内 容)：

割り当てられた国の外務大臣または組織の指導者と仮定して、以下の観点から担当国とその他の国際関係についてリサーチ。

- ・国内情勢や不安要素
- ・中東地域でのポジション、他国との国際関係
- ・今後どのような対外政策をすべきか

【3】7月勉強会

7月勉強会では6月で習得した中東情勢の基本的知識のもと、中東研究で著名な池内恵先生をお迎えし、レクチャーをしていただいた後に発展的な議論をした。最新の中東情勢を踏まえて、専門家の方が今の中東をどのように捉えているのかを知れたのは非常に大きな収穫であり、池内先生の話が塾生が真剣な眼差しで聞いていた。それと同時に、まだまだ私たち塾生も更に勉強しなければ本当の意味で池内先生がなされたようなハイレベルな議論についていくことはできないと痛感した。その意味でも7月の勉強会は前半戦の締めくくりとしてふさわしい内容であったように思う。

(タイムスケジュール)

- ・課題報告

- ・ディスカッション1

「ISISは"イスラーム的"か」

- ・池内先生からのプレゼン

- ・イスラーム教の規範を中心に、イスラーム教的な国際法秩序などを解説

- ・ディスカッション2

「ISISがいる世界といない世界の展望を考える」

- ・藪中先生のお話

《ディスカッショントピック》

(1) ISISは本当に「イスラーム的」なのか？

"What ISIS Really wants?"とその反論文に基づいて議論する。

もしISISが「イスラーム的」でないならば、何がISISを生み出したのかを考える。

(2) ISISが「いる世界」と「いない世界」の展望を考える

・ ISIS がいる世界：異なる規範、社会秩序が共存する世界

・ ISIS がない世界：一つの規範しか許容されない世界

→それぞれにおいて、どのような世界になるのだろうか、パターンを考える。

●事前課題

(内 容):

池内先生が指定くださった ISIS に関する有名な「英語論文」とそれに対するいくつかの「反論」を読み、日本語で「要約」する。

→当日の勉強会の1番最初にその論文の要約をグループごとに5分ほどで簡単に発表。

(ねらい):

「ISIS はイスラーム的か」という文章とその反論を読み、理論的な対立構造を探る

(池内先生の意図)

日本人の価値観でもって、異なる規範を議論するのは難しい。

英語圏では移民の存在によって価値観の多角が進んでいるので、英語圏で議論になっているものを読むのがよい。我々は英語圏とイスラーム圏の外にいるため、考え方を相対化することができる。日本、イスラーム圏、欧米、三つの価値観を行ったり来たりしながら考えなければならない。

(今回扱った論文)

① "What ISIS really wants"

② Experts weigh in : How does ISIS approach Islamic scripture?(Part1~5)

③ The Atlantic: "What ISIS Really Wants": The Response

④ SALON: "The Atlantic's big Islam lie: What Muslims really believe about ISIS"

●イスラーム勉強会事後課題

- ・中東情勢についてのあなたの考えを理由付きで述べてください。
- ・6、7月の勉強会を通して、自分に点数をつけるなら何点？
- ・自分のよかった点、悪かった点
- ・今後の抱負

【4】総括

準備段階から考えると6、7月の2回の勉強会成功のために相当な時間を費やした分、終わった時の達成感も大きかった。勉強会初の試みとして池内先生をゲストに迎えられたことも、勉強会に深みを持たせることができた点で有意義だったと思う。「中東」という地域が世界から注目を浴びて久しいが、私たち勉強会担当の4人も調べれば調べるほどこの地域に絡み合う利害関係の複雑さ、歴史の根深さ、イスラーム教という宗教を考えることの難しさに突き当たった。塾生のみみんなにイスラームをもっと知ってほしいという思いを胸に必死に準備に励んだが、そのプロセスでレクチャーできる程度にまで必死に勉強し理解しようとしたという点で、最も恩恵を受けたのは他でもない勉強会担当の4人だったように思われる。

勉強会全体を振替ってみて最も苦勞したことは、「藪中塾」という様々なバックグラウンドや興味関心を持つ「塾生」が集う場で、いかに全員にモチベーションを持って勉強会に臨んでもらうかということであった。課題の量も多かったという感想も多くもらったが、むしろ僕たちとしてはこれくらいの高水準を勉強会のスタンダードとしたかったし、大きな志を持つ若者が集うこの組織もそうであるべきだと思っていた。そしていざ当日蓋を開けてみると皆さんがやってきてくれた課題のレベルの高さに驚かされたことは今でもよく覚えている。2ヶ月間というわずかな期間ではあったが「イスラーム勉強会」が今後の藪中塾のさらなる発展に少しでも貢献し、皆様の記憶に残っていれば幸いである。

安全保障関連法案の是非(8月)

担当 大辻允人
小宮山宗
田中 聡
沼田悠佑

8月に妙心寺に行った合宿では2015年に日本中で大きな議論を巻き起こした平和安全法制をテーマとして扱った。合宿は二日間に渡って行われ、1日目は集団的自衛権に、二日目は平和貢献に視点を置いて勉強会を行った。

・1日目

1日目の集団的自衛権をテーマとした勉強会では、それが違憲か合憲かは考えず、そもそも集団的自衛権の行使が今の日本に必要なのかどうかを議論した。その際に、①日本を取り巻く安全保障環境の根本的変容に伴い、②抑止力を高めて戦争を未然に防ぐために、③集団的自衛権の行使を容認する、とした政府見解をもとに、この三つをつなぐ論理性が存在するのかを考えた。当時の平和安全法制をめぐる議論は賛成派、反対派の双方が「日本の安全保障が危機に瀕している」、もしくは「これは戦争立法だ」といった感情的な意見から成り立っていたような印象を受けた。そこで、この合宿では、本当に日本の安全保障環境は変化しているのか、変化しているとして平和安全法制が抑止力につながるのか、その際に集団的自衛権の行使というのが必要なものなのか、といったような論理展開を通してより実のある議論ができるように試みた。

当日は一通り、議論のバックグラウンドとなる情報の整理を行った後、集団的自衛権の行使を必要とするグループと、必要でないとするグループに分かれてディベートを行った。政府見解の説明に近い主張を行った賛成派に対して、反対派は東シナ海の情勢は本当に根本的に変容しているのか、集団的自衛権を行使することによって出る弊害、またそもそもそれを行使するとして実行できるだけの能力を持っているのかといった点で批判を行った。

勉強会担当としては全体で議論に入る前に、よくニュースなどで聞くものの詳細にはわかっていなかった基本的概念の説明を行ったことで、議論がより中

身の濃いものにできたと思う。しかし、4時間といった初日の限られた勉強会の時間の中で、後半に行ったディベートが若干消化不良に終わったように感じた。議論の前に前提となる知識の説明は必要ではあるが、それに時間を取られすぎて一方向の勉強会になりすぎないように時間の配分を考える必要があると考えた。

・2日目

2日目のテーマである平和貢献では、PKO や国際平和共同対処事態における他国軍支援活動(国際平和支援法制定により新設)は、本当に国際平和に貢献するのかというテーマで議論を行った。初日と同様に、政府の見解を紹介しつつ、その見解が本当に紛争に介入する軍隊の活動の実態を反映したものなのかという点から議論を提起した。その際に意識したのは、現実に即した議論を行うことだ。というのも、自国が紛争処理に関与したことが少ない我々は、PKO のような活動が実際にどのように行われているのかについての知識が足りないと感じたからだ。国会の答弁でもそうであったし、国民の理解はさらに足りなかつただろう。実際、我々は PKO を日本の視点から考えることになれすぎており、カンボジアなどで活動する自衛隊などに、例外的に日本が関与した少数の事例を知っているに過ぎない。確かに、カンボジアにおける PKO 活動は現地からも歓迎され、成功だったといえる。一方で、PKO の様相はより激しさを増しており、PKO に参加した軍隊が紛争に巻き込まれることや、新たな混乱をうむこともあるのだ。

そこで、①活動に参加した自衛隊の安全は本当に保障されるのか、②日本が新たに行う PKO や、後方支援活動は本当に国際平和に貢献するのか、という2点を主要な論点とした。

当日の議論では、上記論点のほかに、国際平和に貢献できるかとは別にその活動に参加すること自体に外交的価値があるという意見や、日本の歴史や政治的立ち位置を踏まえた国際貢献のあり方を考えるべきであるという意見もあった。確かに、既存の活動の枠組みに参加するか否かが安保法案をめぐる議論の中心になっており、日本が能動的に新たな枠組み、参加のあり方を構築していくという意見は新鮮であった。また、そこから派生していくなかで、平和とは何かというより本質的な問も出され、日本から見た平和と紛争に巻き込まれた方からみた平和、国際社会にとっての平和はそれぞれ異なるのではないかという議論が展開されていった。

その後、初日の内容を含めた安全保障法案全体についての議論を行うと、重点が集団的自衛権の行使の是非に置かれてしまった。やはり、集団的自衛権が関心の中心であると痛感したが、国際貢献のあり方について議論する時間が十分にとれなかったのは勉強会担当として反省しなければならない。短い時間ではあったが、平和とは何かという本質的な問にまで議論を発展させることができたのは収穫であった。特定の施策がよいか悪いかという目線だけでなく、その背景にある問題をとらえ、その問題を解決するためには何をすればよいのかというところまで考えることのできる勉強会を継続していきたい。

憲法 9 条を考える(9 月)

担当 金谷優希子
堤 さりい

■ 勉強会の構成

「憲法 9 条」がテーマであった当勉強会における全体方針は、文言の解釈や法律論に陥ることをできる限り避け、9 条の「来し方」を多様な切り口から検証することで、「今」の 9 条を取り巻く情勢を立体的に理解し、各々の塾生が考える理想の「行く末」を模索することとした。そのため、勉強会の構成を担当からのプレゼンテーション（9 条の過去・今）とディスカッション（9 条の未来）に大別し、プレゼンテーションの段階で①憲法史から見る 9 条の成立過程検証、② 9 条改憲派・護憲派の論点整理、③比較憲法の視点から見た 9 条の評価、④ 9 条の今日的意義の検討という 4 つの切り口から知識の提供を行った上で、「ありうる憲法の形」である 2012 年自民党改憲案を踏まえ、主権者としての「我々」は、今後 9 条をどう扱うべきかを議論した。

■ 勉強会当日の内容

✓ プレゼンテーション

1. 憲法史から見る 9 条
 - i. 一般的には 9 条は GHQ の押し付けであるとの認識がなされているが、決して一方的に押し付けられたものではない。憲法成立過程を連合国・GHQ・日本国政府・民間それぞれの動きから追うと、GHQ 案は日本の民間憲法草案が下地になっていることや、意見陳述・草案変更の機会が何度も設けられていたこと、GHQ 側から政府に憲法改正提案が為されていたことが分かる。また、9 条制定に国民国家の主権である武力装置放棄の意図（日本無力化）があることは否定できないが、天皇制の存続という日本側の要請と安定した占領統治という GHQ 側の期待が一致したことも 9 条制定の大きな要因だったと考えられる。
 - ii. 単なる戦争放棄の意図だけで成立した訳ではない 9 条は、沖縄の基地・自衛隊の違憲性・周辺諸国からの懐疑という今に至るまでの国家的な問題の根となっている。沖縄の軍事要塞化は GHQ 側の意図だけ

でなく、昭和天皇の承認の下行われた事実や、自衛権解釈の変遷と今回の平和安全法制による自衛権解釈の質的な違いについても言及した。

- iii. 9条改正の政治争点化は1950年代以来のものである。現在改憲を掲げる自民党内も当時は一枚岩ではなく、主流派は米国世界戦略の一角への組入による日本防衛（安保条約重視・対米依存）を、改憲派は再軍備による日米同盟の対等な攻守同盟化を意図していた。同時期に護憲派も結成され国民の支持を得るが、一方で朝鮮戦争など周辺諸国との関係性から再軍備化を望む声も高まるなど矛盾した国民の意識が選挙結果や世論調査から読み取れた。また、施政方針演説では憲法改正を掲げ選挙では憲法問題の争点化を避ける自民党の慣習もこの時期以来のものである。

2. 改憲派・護憲派の主張

- i. 改憲派の唱える、時勢への不適合・表現の曖昧さ・自主性を欠いた憲法は無効という主張、また、護憲派の唱える、戦後期の平和維持への貢献・戦争抑止力・世界からの評価・立憲主義の毀損など、どちらの主張にも理解できる点・不備を指摘できる点が存在していることが9条改正にまつわる問題を複雑化させ、国民の全体像理解を阻害し、護憲＝平和、改憲＝軍事化というイメージを流布させている。
- ii. 9条改正に対するスタンスも改憲派・護憲派の2つではなく、「現在の解釈による現状の受け止め方」と「条文の扱い方」で少なくとも4つのスタンスに大別される。

3. 外から見た9条

- i. 日本国憲法は世界唯一の平和憲法ではない。憲法を持つ国家188のうち、平和主義と呼べる条項を備える国家は84%に上り、核兵器禁止や中立非同盟・外国軍事基地の不設置などを明記している国家もある。そのような他国憲法と比較した際の日本国憲法の特徴は、国防条項・国家緊急事態条項を欠いており、国際平和への志向と国防バランスが明記されていない、自衛戦争放棄の有無が解釈による等の点が挙げられる。
- ii. 敗戦国であるドイツとの比較によると、ドイツ憲法では平和条項・国防条項が具体的に明記されると共に、戦前体制からの脱却（憲法の断絶性と制定自主性）が保全されていることが、隣国からの評価や関係性に大きく寄与している。

- iii. 外国からの 9 条の評価はさまざまであり、同一国内でも政党によって評価が異なる場合がある。したがって、外国の評価は改憲・護憲の判断基準とはなりえない可能性がある。

4. 9 条の今日的意義

9 条の意義を検討し直す必要がある。現在考えられる 9 条の意義は、第二次世界大戦における残虐行為に対する深い反省の意を周辺諸国へ示すという制定時点における意義から変質している可能性がある。

✓ ディスカッション

1. 事前準備

当日のディスカッションテーマと重要な論点を公開し、勉強会担当が収集した各種資料や個人で調査した資料をもとに、憲法 9 条をどう扱うべきか自分なりの主張を醸成することを求めた。

2. 当日の議論

- i. 今後の 9 条の在り方を模索する際に参考になる、2005 年・2012 年の自民党による新憲法草案の概要を 9 条に関する部分のみ紹介すると共に、改憲派・護憲派それぞれの識者の意見・見方を提示した。
- ii. 各々がディスカッションテーマに対する自身の意見を述べる形式から開始した。特に「現行憲法は GHQ がつくったものであるから、日本人として憲法自主制定すべきかどうか」、「日本の安全保障はどう在るべきか」という 2 つの切り口について言及してもらうことによって、主権者である我々にとって 9 条とは何なのかを自分なりの言葉で回答してもらった。塾生の意見としては護憲派が優勢であったが、一部改憲派も見られた。しかしながら、「平和主義」を徹底させたいからこそ改憲を行い、政府の恣意的な解釈を制限すべきであると主張する者もいるように、その内実はプレゼンテーションで指摘した通り多種多様であった。

■ 勉強会の運営の反省点

- ✓ さまざまな論点があるディスカッションテーマであるが故に、議論自体も散漫なものになってしまった。当問題がいかに複雑で込み入ったものであり、メディアで報道されるように、容易に単純化できない構図を持っているのかを実感することはできたものの、スムーズな意見構築・交

換のために、勉強会側としてより一層分かりやすい論点を事前に提示すべきであった。

- ✓ 知識の共有のためのプレゼンテーションに大幅に時間を割いてしまったため、もう一つのディスカッションテーマとして勉強会担当側で容易をしていた「今後の憲法教育の在り方」、つまり、塾生自身の経験を振り返って、自身が受けてきた憲法教育と、これからの憲法教育について思考を深めるといふ議論の時間を設けることができなかつた。選挙権の年齢引き下げや若者の投票率の低さなど、若い世代に対する政治教育の重要性が社会的に認知されつつある中で、この点について議論できなかつたのは残念である。

■ 振り返り

当月のテーマを設定した第0期生は、よもや、まさにこの時期に「憲法9条」の文字がこれ程までに紙面を賑わし、国家的問題として人々の議論を喚起するとは予想していなかつたに違いない。2015年夏、安倍内閣による平和安全法制等の整備をめぐる一連の騒動を期として、平和主義を規定する9条についてさまざまな立場の人間が多様な主張を行った。冷静な議論ばかりではなく、自らとは異なる意見に対する不寛容性が顕在化する過熱した雰囲気の中で、我々が常に抱いていたのは「何を信じればいいのか」という問いであった。

もちろん、「完璧に正しい真実」などあるはずもない。しかし、塾中塾生たる者、この問題について自らの意見を発信するにあたり、国内の人だけではなく国外の人々をも説得できるだけロジックを持たねばならない。そのためには、玉石混淆の情報・主張を選別し、信ずるに足るロジックを組み上げる「判断基準」の形成が必須である。そのような目的に立って改めて9条を見直した時、「9条の条文以外、本当は何も知らない」ということに気づいた。

だからこそ、そもそも日本国憲法はどのようにして成立したのか、我々はどうのようにして日本国憲法を受け入れ、共に歩んで来たのかということから、「知る」ことを始めようと決め、勉強会の発表内容を構築した。その過程では、巷間で「正しい」とされる言論・主張がいくつもの間違いを含んでいることや、「公然と語られない事実・データ」が存在していることを知ることとなった。まさに、過去を知らずして未来を知ることにはできないということを痛感したのである。

「民主主義の眼目は、率直で力を込めた討論である」という言葉があるが、

藪中先生が藪中塾生に求める力、地球を舞台として、掲げた目標に向かって、自らの意思で未来を切り開くのに必要な力こそ、率直で力を込めた討論を行える力であると考え。日本という民主主義国家に生まれた一人の人間として、「憲法 9 条の今後の在り方」という難題に対してもユニークな意見を発信できるよう研鑽に努めたいと思う。

日本の移民政策とその展望(10月)

担当 庄司 玲菜
園田 碧

課題点：少子高齢化という社会問題が日々深刻化する中、日本政府は労働力確保のために、移民政策を推進しようとしている。しかし、外国人労働者、「研修生」と呼ばれるような人々の環境には大きな問題があるのではないか。そもそも、移民の受け入れは拡大すべきなのだろうか。そして、もし移民をより多く受け入れることを決断するのであれば、どのような問題が解決されるのだろうか。

キーワード：シリア移民、外国人研修制度、介護・看護人材

勉強会当日の議論の進め方：

プレゼンテーション (約 60 分)

- ① 介護・看護人材が圧倒的に足りていないという現状に加え、外国人研修生としてやってくる人たちにとって、それらの分野で職をえるには、言葉の壁・資格を取ることの難しさがある。
- ② 移民は「単純労働」と呼ばれるような仕事（例：建築関係）には就けない。しかし、それでは人材不足になるため「外国人研修制度」という、いわゆるインターンシップのような制度が存在する。過去に外国人が「3K」と呼ばれるような労働に就かされている実態を改善するために、彼らが単純労働者として日本に来ることを禁止した。しかし、実際には、外国人研修制度にも職場環境のずさんさ等、様々な問題が存在し、根本的な問題は解決していないように思える。
- ③ シリア難民について、日本は受け入れを拡大すべきなのだろうか。日本は昔から政治難民等の受入数が、他国と比べて極端に少ない。人道的見地から、日本は彼らをより多く受け入れるべきなのか。それともヨーロッパで起きているような現地の国民と移民との軋轢が存在する現状や、日本社会の社会保障費等の予算の限界を考慮すれば、移民を受け入れる余裕はないと考えるべ

きなのか。

ディスカッション (約 120 分)

一人ずつ意見を順番に述べていってもらうような形式をとった。結果的、人道的見地・労働力確保のため、移民は受け入れるべきという意見が多数派になる一方、現在の状況では移民にとって不利な状況が続くため、改善されるべき課題はたくさんあるという意見も多数出た。それらが改善されるまでは、移民の拡大には慎重になるべきであるという意見もあった。

反省点：課題の出し方が「新聞記事を読んで、それらについての自分の考えを書く」というものであった。それぞれ塾生の考えを自由に多様な観点・切り口から見るができるという点では良かったかもしれないが、課題を出す側としては、何を中心に議論したいのかという、勉強会担当者のビジョンが見えにくかったのでは、思った。もう少し課題に対して具体性を持たせれば良かったのではないかというのが反省点である。また、今回のテーマとして、移民の流入が拡大するのであれば、何がどうされるべきなのかという課題を設定したのであるが、あまり具体的な政策等に関しての意見はあまり聞かれなかったように思える。「移民は受け入れるべきだが、では実際どうすべきなのか。何が具体的にされれば現状は改善されるのか」というところまでは踏み込めなかったように感じる。

原発を巡る諸問題とエネルギー政策(11月)

担当 河崎涼太
小林勇貴

1. 勉強会（当日）まで

勉強会担当の事前準備に先立って私たちがまず行ったことは、可能な限り毎週決まった日時に互いの成果を共有し合う場を持つことだった。それはモチベーションを保つ機会となったし、また、その時に互いの疑問点を指摘し合うことがさらなる知識の蓄積に繋がった。当日の勉強会の形式を決定したのは勉強会の一ヶ月ほど前の、十月初旬のこと。「エネルギーは単に私たちの日常にある電気のみではなく、時には紛争の根源にさえなりうる」ということを念頭において、各人がエネルギーに対して肯定的、批判的な視点を獲得できるよう、ディスカッションをメインとした勉強会を設定しようと考えた。具体的な形式は以下の通りである。

<勉強会の形式>

「火力」「水力」「原子力」「太陽光・風力（を始めとする再生可能エネルギー）」のように、日本においてエネルギー政策の俎上に載せられる発電分野を取り上げ、塾生を各グループに振り分けた上で各グループ10分のスピーチを行う。場所は国会の、発電割合振り分けの場と設定し、藪中塾長、勉強会担当が議長となり、それぞれのスピーチに加え、20分間の質疑応答も含めて、最終的に議長が発電割合の決定を行う。なお、当勉強会で予算振り分けが行われる国は、日本とした。

チーム分けに伴い、各チームへの事前課題として、当日に行われるグループ別発表の準備を設定した。また、勉強会担当は塾生のサポートとともに、勉強会への準備を進めた。

2. 勉強会当日

果たして当日は、意見が活発に飛び交う会となった。簡単に各グループの主張をまとめる。

火力発電チーム

→ メリットとしては「天候に左右されず」「立地制約が水と燃料の確保だけで済み」「エネルギー効率がよく」「万が一事故が起きた場合も局地的被害で済む」こと等があげられた。

→ デメリットとしては「環境への負荷が大きく」「燃料の確保が国際情勢に左右されやすい」こと等があげられたが、前者へは技術革新として低炭素化技術の例を、後者には産出国が年々増加する天然ガスを使用することを提案した。

原子力発電チーム

→ メリットとしては「発電単価が安く」「資源確保が安定していて「天候にも左右されず」「CO₂等の排出がなく環境に優しい」こと等が挙げられた。

→ デメリットとしてはしばしば原発批判として挙げられるコストや安全性を取り上げ、前者については他の発電方法に比べて発電単価は格段に安いこと、後者に関しては喫煙者や自殺の割合と比べた時の原子力発電の事故によって死亡する確率を挙げた上で、現在、数としては十分に国内に存在する原子力発電の利用価値を主張した。

水力発電

→ メリットとして、水力発電は他電源に比べて「CO₂排出量が最も少なく」「発電効率が最も高く」「発電コストが最も低く」また、「安全性が最も高い」こと等が挙げられた。

→ デメリットとしては、しばしば水力発電の拡張性の乏しさが叫ばれる中、小水力発電の潜在的拡張性を挙げ、地産地消が可能な水力発電の利用継続と拡大を提案した。

太陽光・風力発電

→ 再生可能エネルギーの代表格としてしばしば列挙される太陽光、風力発電のメリットとして、「環境に優しく」「個人投資家や家庭が参入し易く（＝ローカルビジネスの形成につながる）」「コスト、リスクが低い」こと等が挙げられた。

→ デメリットとしてしばしばあげられる、発電の不安定さや経済性の低さに関しては、これからの技術革新を見越した提言が行われた。

さて、勉強会では事前に割り振られたグループごとに意見を主張し合ったため、塾生にとっては、本来の自分の意見とは違うものを堂々と言う、あまりない貴重な経験となったのではないだろうか。また、事前課題から当日の発表・議論を数人ずつのグループに割り振っていたため、普段はあまり話さない塾生間の交流が生まれるきっかけにもなった。一方で、この勉強会形式の反省点としてまず勉強会の構想を練る時点において、国際的な視点がやや足りなかったということが挙げられる。さらには当日、議論が白熱しすぎたことによって本題について深く議論する時間がなかったこと、また、参加した塾生たちに勉強会后、任意で記入してもらったアンケートを見ると、事前課題が多すぎたという声も散見されることからこの勉強会の形式が第 2 期の勉強会担当に向けて、勉強会の質の改善に向けての一つの参考となることを願っている。

人工知能(12月)

担当 草野仁志
高橋幸子

1. 各月の勉強会について、どのような内容の勉強会を行ったか

勉強会全体として、人工知能が社会に及ぼす影響及び可能性、それに伴う問題に対する、知識や考えを身につけてもらいたいと考えた。また、薮中塾は文系の人が多く、人工知能は普段馴染みの無いテーマである。そこで、能動的に身近なところに対する応用をまず考えてもらい、その上で背景知識を身につけてもらう。その上で他の人の見方と自分の見方を相対的に比較することや、人工知能の応用性や社会に及ぼす影響をテーマとした議論を行った。そうすることで、できるだけ抵抗感無く思考を深めてもらうよう心がけた。

具体的には、事前課題として、まず勉強会参加者に「人工知能技術等に関して2020年にどういう社会になって欲しいか」というテーマで発表資料を作成してもらい、さらにそのような社会を実現するためには、「行政」、「法律」、「民間」それぞれの立場の人がどのように役割を果たせばよいかについての計画を作成して、提出してもらった。

勉強会当日ではまず、人工知能の歴史的な背景や近年の人工知能のトレンドとそれらがどのように社会に影響するかについて講義を行った。そして、事前課題について発表した後、事前課題の提出物中で興味深かった3つ「採算性の低さが、大きな障害となっている難民裁判における、庇護希望者の弁護を人工知能によって補助する仕組み」「衰退しつつある林業に対して人工知能を応用し、林業及び日本の森林を再生する試み」「母親の育児負担・ストレスを軽減するための、人工知能の応用」について提出者に発表してもらった。

その後、「近い未来、人工知能は人間にプラスかマイナスか」というテーマについて、2つのチームに分かれてディスカッションを行ってもらった。

ディスカッションでは、人工知能による過失についての責任の所在の不明確さ、人工知能技術を持つものに対する富の集中から格差問題が更に深刻化してしまうことが懸念されることが指摘された。

その一方、過失の所在の問題や格差の深刻化などの問題は、人工知能以外の

技術に関しても同様に主張でき、経済的合理性にもとづき導入が進むならばよしとしても良い。むしろ、人工知能により過酷な労働が減って創造的な仕事に人類が集中できる。格差問題に関しても、人件費を削減したサービスが出現し貧困の解消に繋がるのでは無いかなどの意見も出ていた。

2. 課題の出しかた、

良かった点

- ・誰もが興味を持ちやすいような課題にした。
- ・早めに課題を出した。
- ・周囲の課題を見ながら考えを洗練させていけるように、課題を段階的に出題した。
- ・フィードバックを行った
- ・やる気を起こすために、コンペ形式にした。

悪かった点

- ・課題の負担が大きかったかもしれない。

3. 当日の運営のやり方はどうであったか

良かった点

- ・課題の中で興味深かったものを発表してもらったのは、考えを深める上で良かった。
- ・議論において、語句の定義からあえて考えてもらうことにより、より深い洞察を得てくれていたように思う。

悪かった点

- ・文系の人に親しみにくい内容であるので、知る動機付けをもうすこしできれ

ば良かったと思う。

- ・議論がすこし迷走していたかもしれない。

農業からみる TPP(1 月)

担当 川部好輝
竹中李香

- テーマ選択理由

2015 年の 10 月に TPP の大筋合意がなされた。故に TPP は同年にとって非常に時事的な話題であったといえる。合意した 31 分野の中でも農業分野は、“聖域”として食品を中心に注目されていたので、今後の日本の農業の方向性を TPP というグローバルな状況においても、議論を通して見出すことは非常に有意義であると考えたから。

- 問題意識

問題意識として、農業に関しても TPP で合意がなされたということは、既に国内で多くの問題を抱えている農業が、今後食品各々の国際競争力または食料安全保障等グローバルな課題においても今まで以上に対策を取らなければならないことを意味する。この状況の中で、TPP の全体的な特徴と、その農業部門の特徴、日本の農業問題の本質、そして、TPP に関与することで生じ得る課題の 3 点を認識することを意識した。

- 勉強会運営で注意した点

日本の農業問題と TPP は、立場によって捉え方も大きく変わるものである。勉強会全体で多角的に問題を捉えることを目的とする事前課題を作成した。具体的には、コメ、小麦等品目別の農家、農協、政府、企業等農業に関する様々なアクターを提示し、塾生はそこからひとつ以上のアクターを選択し、その立場から TPP に賛成か反対か、または、どのような政策をするべきなのか意見をまとめてくることを事前課題とした。さらに提出不要の課題として、日本の農業問題と TPP を俯瞰的に捉えたいうで、個人としての意見を考えてくることを要求した。

具体的なアクターを各々の塾生が選択し、塾生一人ひとりが異なる視点か

ら議論に参加することで、日本の農業の複雑な状況を把握しやすくなると考えた。さらに個人の考えをあらかじめまとめてくることで、勉強会の最終議題である「攻めの農業を実現するための藪中塾戦略を考える」という大きなテーマにも段階的に取り組めるように注意して企画した。

- 勉強会当日で出た意見

当日は事前課題の発表を行った。日本の食品の質の高さから比較的 TPP に賛成する立場が多数であった。発表では、国際競争力の視点に立った経済的合理性に関する意見が多く見られた。具体的にはフランスにおける高級料理としての日本料理の例、及び香港における日本産とオーストラリア産の食品の価格差による視点などからである。しかし議論の中では、食品の価格競争という経済性だけでなく、食品の安全性と所得格差の拡大を指摘した意見もあった。所得格差がひとつの社会問題となっている今日であるが、関税撤廃による海外からの低価格食品の増加と日本産の食品の高級化と、日本で広がる所得格差が結びつくことで、食の安全性にも格差が生じるのではないかという意見も出された。また専門性を生かした観光学の視点から、日本の農作物をランク付けすることで日本の食品そのものをブランド化させ、それが地方の地域活性を促すとの意見もあった。また、自身の出自に関する経験から具体的な小規模農家の実情をもとに TPP に対する農家の捉え方を述べた意見もあった。全体的には、価格競争等数値を根拠にした意見と今後の予測、また数値だけでは読み切れない農家の実情をもとにした意見の双方が議論の中で出たのは、今回の勉強会において良かった点であると考えている。

- 勉強会を振り返った反省点

1月勉強会は日本の農業問題を中心に、グローバルなテーマとして TPP も視野に入れた勉強会を進行させる予定であったが、両テーマとも内容の濃いテーマであったので、勉強会の限られた時間の中では、議論が深まりにくく、拡散しやすいように感じた。また勉強会担当のプレゼンテーションも制限された時間の中で、すべての議題を網羅することは困難であった。バランスをとるため多くの議題を扱うと、その分、個々のテーマの内容が希薄になってしまった。勉強会当日前に、塾生全体として共通する問題意識を持ち、その中でも取り上げるべきポイントを中心にプレゼンテーション及び、ディスカ

セッションを進行させるべきだったと考える。

塾生の声

本章では、塾生がこの一年間で学んだこと、考えたことを踏まえて、自身の意見を述べる。

蕨中塾での学び

文責：板倉美聡

様々な専門性、志、可能性を持った若者達が、蕨中三十二の元に集まり、現在のそして今後の日本と世界の潮流に向き合い、互いに本気でぶつかり合い議論し合う。そのような議論の場としての蕨中塾は多く語られているが、私は、また別の蕨中塾の側面は勉強会の企画・運営を学生のイニシアチブに任せることによって、自主性を育てる場としての機能、そして互いの知的好奇心を思いっきりぶつけ会える仲間が得られるという出会いの場としての機能を併せ持つ点であると考えている。

私が企画を担当したのは、唯一6、7月と2ヶ月間に跨った中東勉強会。年齢も大学も個性もばらばらだが、一様に飽くなき知的好奇心を持つメンバー4人で、チームが動き出したのは5月の頭だった。勉強会の目的をどこに置くか、それらを達成するためには、混迷を極める中東情勢の中でどのようなトピックを選択すべきか、ディスカッショントピックはどうすべきか、課題図書と事前課題は何を選択すべきか、ゲストに誰を呼ぶべきか。そして23人の塾生を動かすために、どんな仕掛けが必要なのか。スカイプ上のディスカッションは深夜にも及んだ。議論が紛糾し、見えていたはずの方向性がわからなくなることも少なからずあった。ただ、思い返してみれば、そうやって路頭に迷ってしまったような時間も、知れば知るほど複雑なイスラム教や中東情勢、そんな未知への知的欲求に振り回されてわくわくするような時間だったように思う。そして、全く互いに知らなかった学生4人が集まってたった二ヶ月の間でチームを編成し、それぞれの持ち味がまるで歯車のように噛み合っただけで動き出す感覚は貴重な経験だった。勉強会終わりに、懇親会の席で4人そろってワインのグラスを高々と掲げ、「乾杯！」とねぎらいの言葉とを交わしあった高揚感、いつかきっと懐かしく思い出すだろう。

あなたの周りに、今後の日本と世界の情勢についてたった1時間でも本気で

語り合える仲間が何人いるだろうか。そんなことを口にすれば、ともすれば“意識高い系”と揶揄される現状は、現代日本の社会病理の一種であるようにすら感じずにはいられない。ここでなら、2時間でも3時間でも、そんな話に身を乗り出してくる仲間がすぐに見つかる。「この人、すごいな。」と、思わず舌を巻いてしまう同世代にだって、いとも簡単に出会うことができる。しかもあなたの知的欲求は彼らのそれとぶつかり合って相乗的に高まり続ける。更に全く違う畑から思いもよらなかった新たな視点で切り込んでくる輩まで現れて、議論は鎮まるところを知らない。

春から次のステージへ進むにあたって、一旦は“卒業”という選択肢をとるメンバーが多くいる。かくいう私自身も、来る10月からはイギリスの大学院で引き続き中東をメインに平和構築を勉強する予定である。薊中塾のもとに奇しくもその道が交錯した仲間たちが、それぞれのステージに進んでも、いつか力をつけたその先で、きっと世界のどこかで再会し、共に何かを成し遂げる日が既に待ち遠しい。

藪中塾で得たもの

文責：田中 聡

この一年間の藪中塾での学びは僕に多くのことを与えてくれました。大学のゼミの先輩を通して塾の存在を知り、昨年の講演会に参加したことが入塾のきっかけでした。藪中先生には2回生の時に大学の授業でお世話になっており、外交問題を見る目からディスカッションに参加する上での姿勢まで様々なことを学ばせて頂きました。そうした背景もあり、講演会での塾生の活発な議論の様子を見た時に、一年間藪中先生の下で様々なバックグラウンドを持った塾生たちと共に勉強をしたいという思いが芽生え入塾することを決めました。

月に一度の勉強会は日々の勉強にも良い刺激を与えてくれました。各月でテーマが設定され、事前課題、当日の勉強会、そして事後課題といった形で毎月勉強会が開かれました。テーマはアメリカや中国、中東などといった個別の外交の事例から、憲法や原子力など日本外交に影響を与えそうなトピックなどまで非常に幅広く毎月新たなことを学びました。7月には中東の専門家の先生を外から招いて勉強会が開催されるなど、藪中塾だからこそ学べることも多かったと思います。同期の塾生には非常に優秀な人たちが多く、国際関係について詳しい知識を持つ人から理系が専門の人まで、ディスカッションにおいて先陣を切って発言をする人から議論が硬直しだすタイミングで的確なコメントをする人まで、本当に多種多様なメンバーが集まっていました。このようなメンバーが集まる勉強会では非常に高度な議論がハイテンポで進んでいくので、事前にしっかりと準備していかなければなりませんでした。そのために毎月の勉強会に向けて事前学習を行い、勉強会に参加し、事後学習を行うといったことが日々の勉強にもリズムを与えてくれました。また、タイムリーな時事ネタも含め様々なトピックを学習できたことで、幅広い教養が身につき日々のニュースに対する見方も変わりました。

僕自身は8月に妙心寺で行われた合宿の勉強会の担当で、テーマとしてちょうどその頃ニュースを騒がせていた平和安全法制を扱いました。勉強会の準備のために担当者間で幾度とミーティングを重ねました。勉強会はディベート形式で進め、賛成・反対のそれぞれの立場からその主張に足る根拠を論理的に組み立て、それをぶつけ合うといった形で行い、また合宿の最後には藪中先生 vs 全塾生となって先生を論破するという企画しました。しかし、外務省で長年キャリアを積んでこられた先生だけあって塾生全員でかかっても一向に

追い詰めることはできませんでした。この合宿ではちょうどそこまでの勉強会でアメリカや中国、中東に対する個別の外交問題について学んでいたこともあり、それらを踏まえて日本外交を考え直すいい機会になったと思います。合宿の最後に先生から「よくやった」とねぎらいの言葉を頂いたことがとても嬉しく光栄に思ったことを今でもよく覚えています。苦労もありましたが勉強会を担当できたことは非常にいい経験になりました。

この一年間、藪中塾を通して様々なことを学びました。実際に長く外交の場で活躍してこられた先生から直に外交にまつわるお話を聞いたこと、またそれだけでなく世界で戦っていく上でのディスカッションに対する姿勢や態度から学ばせて頂きました。そして、この塾を通して同世代の非常に優秀な友人たちにも出会いました。ここで学んだこと、出会った人々は今後の僕の人生にとっても大きな財産になると確信しています。

「本気でやる」ということ

文責：沼田悠佑

「本気でやれる人を募集しています。」

昨年の蕨中塾塾生選考会で言われた言葉である。この一年間、自分なりに本気でやってきたつもりだが、「本気でやれ」たかどうかをもう一度振り返ってみようと思う。

「本気でやれる」という言葉には、「本気で」「やれる」という二つの部分に分けられる。大辞林によれば、「本気」とは、まじめな気持ち。真剣な気持ち、また、そのさまを意味する。「やれる」は。動詞の「やる」に可能の助動詞「れる」がついた言葉であり、「やる」とは多義語であるが、ここでは、何かをすることを、広く、または漠然という意味である。蕨中塾ですることといえば、勉強会である。勉強会担当になれば入念に準備し、そうでなければ、与えられた課題をこなしながら勉強会で積極的に発言し議論に貢献していく。

このことが達成されれば、蕨中塾で「本気でやった」ことになるのだろうか。おそらく、大半の塾生は否と答えるであろう。というのも、我々は「勉強会をする」ために蕨中塾の門をたたいたわけではないからだ。目的は人それぞれだろうが、何かを学ぶ場としたいという意識は共通であろう。学びとは、自分を変えることである。それは、知識を得ることに限らず、多様な価値観と触れあうこと、多くの人と議論をするなかで自分の意見をより洗練させていくことなどで成し遂げられる。つまり、学びによって、我々は新しい光景をみることができるのだ。次は何が見えるようになるのだろうか。学びは、また新たな学びの誘因となる。

では、何かを学ぶことができれば、「本気でやった」と言えるのか。これも否である。学びは、それ自体が面白いものであるが、それは終わりではない。我々が希求しているのは、学びの先にあるものだ。先とは、つまり、未来である。研究者になる、教育者になる、国際平和に貢献する、日本のために働く。塾生がそれぞれの夢をもって、その夢を実現させるために必要なものを学びに蕨中塾に集まってくる。そう考えると、私はまだ「本気でやれた」わけではない。むしろ、塾を卒業してからの自分のあり方がこの一年を「真剣に何かをする」ために過ごしたかどうかを判断してくれるだろう。そのために、蕨中塾での学びを糧に進んでいきたい。

グローバル人材を目指すあなたが意識すべき3つ

のこと

対談企画：塾長薮中三十二と塾生有志

文責：板倉美聡

掲載元:Co-media

大学で、メディアで、就職活動で、近年耳にタコができるくらい聞く“グローバル人材”という言葉。皆さんはどんな言葉を思い浮かべますか？留学経験のある人？帰国子女？実はそれだけじゃありません。

そもそも、グローバル化の波から取り残されている島国日本で、考えられているグローバル人材って、世界で求められているグローバル人材とちよつとした乖離があるのかもしれない…

それなら、こんな時は世界情勢を読むプロに聞いてみましょう！

ということで本日は、以前の単独インタビューの続編としまして、元外務省事務次官・薮中三十二氏と、同氏が主催するグローバル寺子屋・薮中塾の塾生4人をお迎えして、グローバル人材とは何か、そしてグローバル人材になるためには具体的に何をすべきか、という熱〜い議論を対談形式でお送りいたします！

“超ドメスティック人材”がステータスだった？

板倉：さて、本題に入る前に、そもそも今なぜグローバル人材が求められているか、という背景について先生にお伺いしたいと思います。先生どうでしょうか。

薮中：そうですね、日本人がもし従来までのように日本の国の中だけで生きていけるならとてもハッピーですが、グローバル化した現代では、どのビジネスであつても外国との付き合いが重要となってきます。一般的な企業で7割、少

ない企業でも 3 割が外国との取引ですから、今まで日本国内だけで完結してきた企業もそうはいかなくなってくるわけです。

例えば、コスト削減のために外国に工場を建てるなど、否が応にも外国との付き合いが必要となってきました。好む好まざるに関わらず、社会がグローバル化を必要としてきました。それでも、一般の日本人にとっては、外国と付き合うのは面倒ですよ。その面倒くささを乗り越えられるのがグローバル人材だと思います。

板倉：なるほど。

藪中：今はもう死語ですが、日本企業や官公庁で自慢気に言われた言葉があるんですよ。「私は“超ドメ”ですから。」という言葉です。「外国とのことなんて私には関係ないです。」という意味なんですけど、どういう文脈で言っていると思いますか？

板倉：うーん…今で言う“純ジャパ”ですかね？「私は生まれてこのかた日本を出たことはありませんけど。」って自分を卑下する言い方ですが。

藪中：いえ、逆にこれは、優越感をもって言っている言葉なんです。当時は日本国内だけで多くの事業が完結していたので、国内事業を任される人は組織において中心的役割を求められているということだったんです。だから「私は“超ドメ”ですから。」と自慢すると、「外国とのことはアホなやつにやらしておけばいい。」という意味なんです。

板倉：へえ～なんだかジェネレーションギャップを感じますね。

藪中：他にも「英語屋」という言葉があつて、「あれは英語屋にやらしておけば

いい。」という使い方をします。つまり、当時は大蔵省からしたら外務省は英語屋ってわけですよ。ただ、外務省の中で“超ドメ”といったら、ものすごいアホになってしまいますから、外務省ではそんな言葉はありませんでしたが。

一同：(笑)

藪中：国際部っていうのは、昔はどんな企業でも別に地位の高い部署ではなかったんですよ。それが今や、国際的な付き合いを社員全員がやらなければならない時代となっている。だから日本企業にとっては、グローバル化というのは大きな変化で、国内だけで十分仕事ができるだけのマーケットがあった時代から、外国を相手に商売をしないと潰れてしまう時代への変化でもあります。そういうわけで、日本社会全体にグローバル化という必然性が生まれ、それに伴いグローバル人材の必要性が叫ばれる時代になったわけです。

板倉：なるほど。しかし、現状の日本では、“実際じゃあグローバル人材って何？”っていう問いに対する企業の答えが的外れなまま、学生が間違った方向性に行ってしまうように感じますね。

藪中：そうなんです、グローバル化で何が求められているかという問いかけはあるのですが、しかしそれに対する企業の答えは極めて日本的なんですよ。それこそ、「さあ、みんなで TOEIC700 点取りましょう」とかね (笑) それグローバル化に対応するための第一歩だと真剣に思っている。極めて島国的発想ですね。

つまり、グローバル人材の必要が十分認識されていても、実際にどんな人材が必要か、というのが答えになっていないわけなんです。

グローバル人材とは、世界規模の課題解決に寄与したい人である！

板倉：ではここからは塾生の皆さんに聞いていきたいと思うのですが、まず最初に堤さん！グローバル人材ってなんだと思います？

堤：そもそも、日本の雑誌やメディアで描かれている「グローバル人材」は、誰のためのグローバル人材かという点で二種類に分けられると思います。二種類とは、世界が求めるグローバル人材と、日本が求めるグローバル人材で、しかし個人的には、それらが混同して用いられてしまっている印象があります。日本が求めるグローバル人材というのは、日本のため、もっと言えば日本政府や日系企業の視点で見たもので、自社の製品を世界で、他国の競合に負けずに売ってこられるだけの能力・意思を備えた人のことを指しているように思います。ただ、こういう人材を、私たちは「本物のグローバル人材」と呼んでも良いのかな？、と。

そうではなくて、私の考えるグローバル人材は、日本企業や日本だけではなくて、世界から求められる人材です。具体的にいうと、今国内外でどんな問題が起きていて、そこでは何が人の幸せの阻害要因になっていて、それをどうやって解決していくのかを真剣に考えられる人。そして考えるだけではなく、その問題に対して、自ら積極的に関わって、実際的な価値を生み出していく人だと思います。だから、グローバル化によって日本の環境が変わったから、私たちがグローバル人材にならなければならないのではないと思います。

板倉：なるほど、ではそういった世界規模の問題解決に取り組める人間になるために、大切なことって何だと思いますか？

堤：一言でいうと、原体験ですね。グローバル人材って定義は色々ですけど、大事なのは「なんでグローバル人材にならなきゃいけないのか」という根本の部分だと思うんです。例えば日本で一生生きていく、日本人としか関わらないっていうんだったら、別にグローバル人材になる必要なんてそもそもないんですよ。そうじゃなくて、グローバル規模で行動を起こしたい、起こさなければならないと自分自身をそう駆り立てる原体験や志があるはずで。そのコアな部分が、グローバル人材を目指す上で重要なのかなと思います。

板倉：堤さん自身、何か原体験になるようなことがあったんですか？

堤：そうですね、私にとっての原体験はインドでのインターンシップ経験でした。インドで一年間過ごす中で、“女性だから”不自由を感じることも多くあって。例えば行きたいところ、やりたいことがあっても、いろんな危険を心配しなければならぬ。「もっと自分の好奇心を追求したい。」と思っても、それができないもどかしさを感じました。こういった経験を通して、女性や子どもなどの社会的弱者が、夜でも安全に動けるような社会が世界中に広がっていくべきだという考えを持つに至りました。

板倉：でも、原体験って得たい！と思って簡単に得られるものじゃないですよね？

堤：そうですね、ある意味「運」かも。だからこそ、学生時代は行動範囲を広げて、色々な世界に飛び込み、色々な人と関わるべきだと思います。私自身も、あの時思い切ってインドに行ってみなければ、「世の中に男女間の不平等がある」という事実は頭でしか理解できませんでした。実際に現実を目の当たりにして、自分自身も女性として不平等・不自由を実体験として経験して初めて、世界で起きている問題を自分ごととして捉えることができる。そしてそんな原体験により“世界規模の課題解決に携わりたい”という強い志を得た人こそが、グローバル人材なんだと思います。

板倉：なるほど、堤さんらしい熱い意見、本当にありがとうございます。

グローバル人材とは、「彼を知り、己を知る」人である！

板倉：グローバル人材とは、世界規模の課題解決を目指す人材であるというお話でしたが、竹中さんはグローバル人材とは何だと思いますか？

竹中：根本的な話になるんですが、“グローバル人材になる”って、目標とする

のはいいと思うんですが、それ自体を目的化してはいけないと思います。なぜなら、そもそもグローバル人材になるために、何か特別なものを身につけなければならないわけではないはずだからです。ただ、従来から一貫して必要とされてきたもののうち、世界中の人と関わっていかなければならないグローバル時代において、特に意識的に強化されなければならないものがいくつかあると思います。例えばそのうちの一つは、孫子の有名な格言である「彼を知り、己を知る。」という言葉に集約されていると思います。

板倉：「彼を知り、己を知る。」ですか…ちょっと具体的に説明おねがいします（笑）

竹中：そもそも、なぜ日本において「グローバル人材が必要だ」とこれほど叫ばれているのでしょうか。こんなに叫ばれている国は日本くらいで、そう叫ばれていること自体、日本社会の閉塞性を表していると思うんです。というのも、日本は島国であるという地理的な特徴によって、古来から異なる文化的背景を持つ人々と関わる機会が希薄でした。私は専門がインドなんですが、インドはものすごく多様な国で、例えばインド全体で公用語だけでも 30、少数言語まで細かく数え上げると 2000 言語あるんですよ。インドにおいては民族間で互いに侵略が繰り返されており、それに伴い情報の流通が行われてきました。こう考えると、インドのような大陸の国においては“グローバル化”っていうのは新しい傾向でもなんでもなく、昔から当たり前のように存在したもののなんです。

藪中：確かに、日本ほどグローバル化が叫ばれている国はなかなか無いよね。例えば日本には“外国”、外の国という言葉がありますが、ヨーロッパでは外の国との付き合いなんて当たり前のことで、そう考えると、日本ほど外との付き合いを特別視する国は少ない。

竹中：そうなんです。でも日本においては、インドやヨーロッパで当たり前存在した外国との関わりが昔から少なかったため、大衆レベルまでに浸透した現代の“グローバル化”は新しい傾向として捉えられ、特別視すらされていません。こういった特殊な背景を持つ日本人にとって、自分達と異なる文化的背景

を持つ人々と対話する機会を持つことは新しい挑戦なんだと思います。そしてこの新しい挑戦に際して、必要とされるのは異質なモノを異質だと排他的になることなく受け入れられる力。そして、異なる文化的背景を持つ相手にも、自分を発信できる力です。更に、そうした“対話”のためには、相手のことも、そして自分のことも知らなければならない。それを集約したのが「彼を知り、己を知る。」という言葉だと思っています。

板倉：なるほど。では「彼を知り、己を知る」ために、具体的に実践していることがあれば教えてください。

竹中：歴史や文化、宗教の違いを理解すること、そしてそれを効果的に実践できるのが文学だと思います。文学とはそもそも、自分が知らない世界を教えてくれるものであり、かつ、地域の特徴を反映したものだとも思います。そして文学とは、例えば技術などとは違い、優劣が付けられる相対的なものではなく、それぞれの個性が重要視される固有の絶対的価値を持ったものです。現在のグローバル社会っていうのは、もはや先進国だけを相手にする時代ではありません。今までは物質面で遅れていると言われてきた、発展途上国含め世界の様々な国々の人々と対話する機会が増えてくると思います。

そして、発展途上国でもどの国でも存在するものが文学だと思います。と言えるのは文学なんです。例えばアジア最貧国のバングラデシュは、アジアで最初のノーベル文学賞をとったタゴールの母国で、ゆえにバングラ人は自国の文学に大きな誇りがあります。更に、こうやって相手が誇りにしているものについて理解を深めて、彼らが知ってほしいなと思っていることを知ろうとするということも重要です。グローバル化時代って言っても、結局、対話するのは人と人ですから。

小川：確かに、本を読むことは遠回りに見えることですが、文学には時代が象徴されていますよね。その時代の人々がどのような思考プロセスをたどって、どのような行動を起こしたかよく理解できますし。

藪中：そういえば文学と言うと、イギリスの外務省の人たちは本当に教養のあ

る人たちで、彼らは何から勉強するのかというと、必ず哲学か歴史なんですね。大学で哲学か歴史を専攻して、そのあとロースクールに行ったんだという人が驚くほど多い。

板倉：へえ～。学部と院で違うことを勉強するのって、日本だったら“ちょっとレールから外れている人”と受け取られてしまいますよね。

藪中：そうだね、でも彼らは、シェイクスピアや聖書を読むのは当たり前、歴史や哲学は必ずやっているし、そういう伝統になっているんですよ。法律っていうのは実用でしょ。

堤：実用ってことはツールってことですよ。

藪中：そう。実用的なことを学ぶ前に自分の教養。それが彼らの伝統で、日本の場合はそうじゃないから難しいのですが。G7なんかの会議に出てくる人たちもそうやって教養を身につけた人たちばかりですから、日本側としてもそれにどうやって負けないようにするか、というのはありましたね。そしてこれらの教養は、自分が何か仕事をする時に、明らかに影響があると思います。

板倉：なるほど、日本人ももしかしたらそういった文学的・哲学的な教養が必要なかもしれませんが、自分を知るという部分にもつながってきますが、竹中さんどうですか？

竹中：そうですね、日本人が自分を知るという意味においては、やはり源氏物語などの古典文学を読むことが有効だと思います。よく、“日本人は無宗教だ”って言う人が多いけれど、世界の人々からすれば、“無宗教”っていうのは思想の根幹を成す部分が無いという意味で、マイナスイメージで捉えられてしまうこともあります。確かに日本の中にも何か信仰されている方もたくさんいますが、アニミズムのような日本古来の思想は体系化されていないだけで古典文学

など身の回りにあるものの中に存在していると思います。だから“私、無宗教なんです”と言うのではなく、古典など日本人の根幹を成す思想が込められた文学に触れて、しっかり日本を世界に向けて発信する力をつけることも重要です。

堤：それに、文学・哲学・歴史って、結局今その国で根強く残っている社会制度や問題に大きく影響している部分がありますよね。「彼を知り、己を知る」際に、表層的な部分に囚われず、我々自身や相対する他者の根幹を成す思想を理解していく上で役立つと思います。

小川：役立つという表現は実はおかしくて、逆説的ですけど役に立つものはすぐに役に立たなくなるものなんです。これだけ時代の流れが速いと、今役立つものなんて数年後には何の役にも立たなくなる。

堤：だから古典読むんじゃない！

小川：そう、だからです！例えば英語にしても、自動翻訳ができれば役に立たなくなりますよね。英語はツールであって根本ではないというのはそういうことです。でも、時代がいくら流れようと、一番根本の変わらない部分ってあると思います。表面的な変化や新しいトレンドなんて、ある程度優秀であればいつでもキャッチアップできます。じゃあ何が根本で、どこを探すべきなのか、というと、答えはやはり文学や哲学だと思います。だいたい今の世の中で人間が悩んでいることなど、本質的に考えれば3000年前からずっと考えていることなんです。学生時代にインドへ行くのもけっこうですが、まずは地味ではあってももっと根本的なところを勉強するべきだと思いますね。

板倉：なるほど。前半の議論も含めてまとめると、現地に飛び込んで自分の目でいろんなものをみて原体験を得るのと、歴史や文学など根本的なモノについての地道な勉強と、両輪でバランス良く行っていくことが重要です。

グローバル人材とは、“感性”をもつ人である！

板倉：さて、ここまで塾生二人に“グローバル人材とは？”というトピックでご意見聞いてきましたが、小川君はどうですか？

小川：一言でいえば、自分にしか発揮できない価値を持っている人だと思います。世間的に言えば、いわゆる“グローバル人材”って英語ができるとか、海外留学経験があるとか、そういう文脈で使われる言葉だと思うんですけど、でも僕が思うにそれらはグローバル人材とは一切関係ないです。現在世界を舞台に活躍している方々というのは、グローバル化の影響でその活躍の場が世界に広がっただけなんじゃないかなと思うんです。例えば、日本人の20代のエンジニアが、15万ドルくらいでGoogleに引き抜かれるとか、今まででは考えられなかったことも、ヒト・モノ・カネが世界規模で動くグローバル化の時代では容易にありえてしまう。だからグローバル人材とは、プロフェッショナルとして自分にしか発揮し得ない価値を持っている人たちだと思います。

板倉：自分にしか発揮できない価値があれば、日本にとどまらずグローバル規模でも活躍できてしまう、その結果としてグローバル人材になるということですね。

小川：そうですね、言語が関係ないっていうのはそういう意味です。もちろん英語くらいはできたほうがいいかもしれませんが、でも本当に自分にしかない価値を持っていれば、英語ができようができまいがグローバルレベルで必要とされるはずなので、そういう意味では関係ないですね。

板倉：じゃあそんなグローバル人材になるために必要なことってなんだと思いますか？

小川：塾長がよくおっしゃっているとおり（前回のインタビュー）、結局は“感性”ですかね。例えば、100の話聞いたとして、その話がどれだけ頭に残るかはその人の能力次第です。賢い人は全部覚えるでしょうね。でもそんなことは

重要じゃない。大切なのは「どれが自分にとって大切なのか」を判断すること。でもそれって結局のところ、感性なんですよ。自分がどういう感性を持っているかによって、頭に残ってくる情報も変わりますし、そこから生まれる行動も変わってくると思います。

藪中：ほお。じゃあ感性を磨くにはどうしたらいいと思う？

小川：竹中さんが指摘したように本を読むというのは非常に重要ですが、それに加えて色んな価値観を持った人と話すことだと思います。

堤：でも、ただ人と話していればいいってもんじゃないよね。

小川：そうですね、人と話して刺激を受けることで、自分の感性が磨かれると思います。

板倉：なるほど、今の意見について、藪中先生どう思いますか？

藪中：僕の講演が終わったあと、よく「いいお話がきけました！」と満足げに言う奴がいるんですよ。でもそんなのは全然だめですね。欧米の人たちの前で同じ講演をやったら、必ず「俺はあなたの言ったことについてこう思う！」と言い始め、そこから議論になっていくんです。彼らは話を一方的にきくだけではなく、相手に対してチャレンジし、自分の考えを言いたがる。僕らが藪中塾で議論しているのも、そういう練習としてなんですよ。国際社会で今何が起きているかをどこまで理解できて、それらについて自分の考えを持ち、それを他人に上手く伝えられるかどうかの繰り返しです。国際関係論や外交だけじゃなくて、どの分野においてもこの繰り返しをやっていかないと、国際社会で相手にされないですね。日本の中で、ずっと生きてきた人間というのは、意見を持ち発信するということがなかなかうまくいきませんね。でもこのような練習をずっと繰り返しやっていると、だいたい分かってきます。それは鍛錬みたい

なものです。そうして勉強していく中で自分なりの感性が磨かれていき、石も磨けば玉になると思います。

小川：具体的に実践できるレベルに落と仕込むなら、エコノミストやフィナンシャルタイムズを読んで意見を持ち、発信するというような事ですかね？

堤：それもいいかも知れないけど、評論家とか傍観者としてではなくて、この問題について自分がどうコミットしていけるか、自分だったらどう解決できるかという当事者の視点が大切なんじゃない？最初は荒削りでもいいから、「自分だったら」という意見を、真摯に相手に投げてみる。相手からも反応が返ってくるだろうから、そのやりとりの過程で自己の感性が形成されていくんじゃないかな。そう思えば、”感性”って、他者との関係性の中で磨かれるものなのかもしれないね。

藪中塾の魅力

板倉：“人と人が磨き合うことが大切”との意見でしたが、そんな場所のうちの一つとして藪中塾があると思います。ここからは、塾生一人一人にその魅力を聞いていきたいと思います。

小川：先ほどの議論の続きにもなりますが、世の中の出来事に対して自分の考えを持つのはすごく大事で、でもそれって誰かに話さないと意味がないと思います。そして、自分の意見を持ち、それを発信し合う場としては、藪中塾は日本で一番に良い環境ですね。外務事務次官という、日本の外務省のトップに立たれた方がいて、そこにそれなりに優秀な学生が集まってきていて、勉強会でも飲み会の場でもディスカッションができる、非常に良い環境だと思います。

板倉：力強いお言葉ですね！ありがとうございます。堤さんいかがですか？

堤：自分の人生において、実現したい目標・目指す場所へ向かう道のりは、決

して平坦なものではないと思います。もしかしたら、一生かかってもたどり着けない、成し遂げられないかもしれない。時には、もういいやって諦めてしまいそうになったり、日々の忙しさに目標を見失いそうになることもあります。でも そんな時に、かつて切磋琢磨した仲間が、一緒に語り合った夢や志の実現に向けて、この世界のどこかで頑張っているんだと考えると、「ああもっと頑張らなきゃ」「私も負けないぞ」と自然に思えてくる。そういう”仲間”は、想像以上に得難いものですが、藪中塾ではそういう人たち、この人たちと一緒にどこまでも歩いて行きたいと思えるような人が簡単に見つかります。普通に大学に通っているだけじゃ、絶対に出会えないような人たちに会えること、それが藪中塾の魅力ですね。

板倉：確かに。ここで得た仲間と一緒に、いつか世界規模の課題を解決できるようになればいいなあとも思います。最後に、竹中さんどうですか？

竹中：藪中塾は、国際社会で起きていることを理解して、自分の意見を持って発信する場を得られる、という点が大きな魅力だと思います。私にとって、藪中塾で勉強していることは普段大学で自分が学んでいることと、全く違うことなんです。だから、自分の専門性を活かしながら、他にも異なる専門性を持った学生と勉強できる。また、一年に一回勉強会の企画運営を担当することで、自己発信の場としても役立ちますよね。

藪中：なんだか嬉しいですね。僕が思う塾の魅力は、一回一回進化しているということですね。何も、初めからどんな場にするか決まっていたわけではなく、固定された藪中塾というものはないんです。みんなで作るものなので、みんなの工夫で一回一回が変化していく、そこが魅力だと思いますし、そのために塾生の自主性を尊重しています。

私自身は、それなりに交渉してきたという経験でどんなふうにしたら外国との関係が上手くいくのか、また上手くいかないのか、そういうことはかなり分かっていますし、それに今世界で何が起きているかというのを観察するということでは、僕はある意味プロなんですね。だから、どんなことが今世界で起きて

いて、どんな風な格好で話をすれば世界と向き合って十分やっていけるか、というところは経験から自分自身の肉になっているところです。そういう部分を塾生に共有しながらやっていければいいなと思います。ただこれがね、大学のクラスではなかなかできないんです、どうしても。大学のクラスでやるよりも一段高みを目指して、みんなが問題意識をもって育っていく場を作りたい。そして塾生一人一人がそれぞれの人生を進んでいく中で、今後どんな社会や世界に出て行っても通用するような、そんな基盤になればいいなと思います。そして、そんな高みを目指す若い人たちと一緒に自分もやっていきたいなと思いますね。

堤：なんか、塾生に対する愛をすごく感じましたね……

一同：(笑)

板倉：いつもクールな先生から愛を感じられて、なんだかちょっとほっこりしてしまいましたね(笑) 愛あふれる対談を世間に自慢する形になってしまい申し訳ないですが、そういった空間にこの4月新たに20名ほどの方々に入っただけということ。皆様奮ってご応募いただきたいところです！

以上